

私たちの活動の中で、その後の行方が気掛かりなのが「北上川河口のヨシ原」である。石巻市の迫波湾に注ぐ北上川河口域一帯はかやぶき屋根や藁の材料になるヨシの広大な群生地で、多様な生態系を形成して流域の暮らしを支えてきた。1996年には、当時の環境庁の「残したい日本の風景100選」にも選ばれた石巻が誇る自然景観だった。

しかし、東日本大震災の影響で河口周辺では大規模な地盤沈下が起きた。震災前には河口付近から約10キロ上流にかけて計183診のヨシ原が両岸に広がっていたが、約60診の地盤沈下で生育環境などに変化が起き、ヨシ原は2011年9月には、約半分の87診までに減少した。

北上川河口のヨシ原の姿を最初に私たちに教えてくれたのは、雅楽の「出前授業」をお願いした雅楽師の中村仁美さんである。雅楽の楽器・籥は吹き口がヨシで出来ている。「ヨシは千年続いている雅楽の伝承に欠かせない」。中村さんの一言が私たちの背中を押

ヨシ原の再生を 10/20

③ つつじ野

し、ヨシ原再生に向けた支援活動に動きだした。

私たちは地元の上野町でヨシ原再生の請願活動に取り組んでいるNPO法人「りあすの森」を支援し始めた。14年9月、イオンモール石巻と石巻赤十字病院で「ヨシ原写真展」を開催。署名活動にも協力し、両者で7800人近い署名を集め国土交通省に提出した。また、中村さんらの雅楽の「出前授業」を10回行ったほか、ヨシ笛の制作授業や演奏会を通じてヨシ原の大切さを訴えた。

地盤はこの5年半で約40センチ上昇し、ヨシ原の生育面積は約16診回復している。ヨシ原の再生実験にも取り組んでいる東北工業大学の山田一裕教授は、「この地域はヨシの刈り取りが日常的に行われてきた所なので、かさ上げやヨシ株の移植などの対策をとり地域の生業を支える存在として早期の再生を目指すべき」と指摘している。北上川河口のヨシ原が一日も早く元の姿に戻ることを望みたい。
(佐藤悠 元石巻支援三七会代表 相模原市南区)

京都・御室の仁和寺は、桜の名所として知られているが、この仁和寺の「御室桜」の苗木が震災後、石巻にも植えられて順調に育っていることをご存じだろうか。

9世紀に創建された仁和寺は、応仁の乱でほとんどが焼失し江戸の初期に再興された。境内の西側一帯に「御室桜」と呼ばれる遅咲きで有名な桜の林があるが、古いもので樹齢が360年を超え、成長も衰えてきたため2007年4月、仁和寺や住友林業などがプロジェクトを発足させ、「御室桜」の増殖を目指してクロウソンの苗木をつくる研究に取り組んだ。3年後の10年1月、バイオテクノロジの手法による組織培養で苗木の増殖に成功。クロウソン苗木の第1号が仁和寺の境内に植栽された。

プロジェクトでは、「御室桜」の気象条件による生育の影響や北限と南限を探るため、北海道から九州までの各地で試験植栽を行うことになり、その一環として東日本大震災の被災地の小・中学校にもクロウソンの苗木を植えることに

仁和寺の桜 10/27

④ つつじ野

なった。「希望の桜プロジェクト」と名付けられたこの取り組みで、プロジェクトは石巻支援三七会にも協力を要請してきた。私たちは住吉中と女川一中(当時)を紹介し、クロウソン桜の苗木が両校に試験植栽されることになった。

住吉中では12年12月、私たちも立ち会う中で、6本の苗木が植えられた。住友林業筑波研究所の研究員6人の指導の下、科学部と生徒会のメンバー30人が校庭の片隅の2か所に苗木を丁寧に植えた。

住吉中ではその後、苗木が1歳50センチくらいに育って去年は1本につき10〜15個の花を付け、今年はその数がさらに増えている。学校では桜の木が伸びてきたため、11月、4本を校庭の別の場所に移し成長を見守ることにしている。また女川では桜の新芽が鹿に食べられ、植えた5本とも花を付けていない。

震災を機に石巻に植栽された仁和寺の桜が満開になる日を願ってやまない。
(佐藤悠 元石巻支援三七会代表 相模原市南区)